

夏目漱石『倫敦塔』論

——死をめぐる物語——

北 川 健 二

二〇八

一

夏目漱石『倫敦塔』は、一九〇五年（明治三十八年）一月「帝国文学」に発表され、翌年五月発行の『漾虚集』^①に収められた。

漱石は明治三三年九月官命によりイギリスへ留学、同一年十月二十八日にロンドンへ到着した漱石は、同じく二二日の日記に「Tower Bridge, London Bridge, Tower, Monument 三見ル夜美野部氏ト Haymarket Theatre 三見ル Sheridan ノ The school for Scandal ナリ」と記し、このことからロンドン塔を見学したことがわかる。日記中、ロンドン塔を訪れたことはこの個所のみであるので、漱石が「倫敦塔」に書いた「塔」の見物は一度に限ると思ふ」と符合するが、越智治雄が指摘するように、「ここから事実の記述以上のものをみいだすことはできない」^②のであり、ロンドン塔訪問から作品『倫敦塔』を書くまでの四年の歳月をみるとき「実際の見物と創作時の漱石の内部の旅との距離はおそらくきわめて大きい」（同）と考えなければならぬだろう。

『倫敦塔』は 余 という一人称の語り手によるロンドン塔めぐりの物語である。江藤淳は『文学論』での「間隔論」を捉えて「門」を「余」が潜ってしまうと、時制はほとんど全く現在形に定着される。ここで一人称の「余」と現在形が併用されているのが、「時空両面」にわたる漱石の「距離の短縮」の欲求^③だとする。しかし、漱石はその『文

学論』において一人称を用いる作品を「同情的作物」と呼び、終局「読者と篇中人物とは作家を離れて対座するに至る」^④と結論付けている。『文学論』をふまえるとき、漱石は読み手の存在を強く意識していたはずである。このように考えると、余の行動と思考を通して描かれる『倫敦塔』は、作者漱石と語り手 余の距離もおのずから「きわめて大きい」のではないだろうか。

本論では、余がロンドン塔めぐりを通して、何を見、何を考えたのかを考察し、『倫敦塔』の意義を見出したい。さらに作者漱石が、読み手に伝えようとしたことを明らかにできたらと考えている。

二

余はなぜロンドン塔を訪れたのか。しかもそれは「着後間もないうちの事」であり、「方角もよく分らん」「地理は固より知らん」時期での訪問である。

余は日本から留学生としてイギリスにやってきた。そこには「御殿場の兎が日本橋の真中へ抛り出された様」に感じるほどのカルチャーショックがあった。当時のロンドンは、産業革命により機械化した大規模な工場が発達し、そこで働くためにロンドンに集まった労働者などにより、著しい人口増加が起こっていた。機械化は、それらの人々をさば

くために「電気鉄道」や「地下鉄道」といった交通機関を作り上げていく。ロンドンは、ヨーロッパの先進国の中で最も発達した文明の姿を余に見せ付ける。余は、日本とイギリスの文明の進歩の差への恐れを抱く。「此広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与へる事が出来なかつた」。それは明治二十一年から二十二年にかけて欧米外遊をした末広鉄腸が『啞之旅行』（青木高山堂 後編明治二十四年九月）で語り手「日本紳士」に驚かせた「世界第一等と云はれる龍動のことなれば市街の繁盛なるは驚く許りにて大道は鉄道馬車と屋根の上に客を載せる乗合馬車にて織が如く其の間には一頭曳き又た二頭曳きの箱馬車は続々と往来し道路もために填塞せり」というばかりの混雑ぶりと同等のものである。文明の進んだ国に対して、そうでない国としての判断基準しか持ち得なかつたロンドン到着後間もない余にとつて、それは個人が埋没する程の出来事であつたはずである。

余が何を学ぶためにロンドンに留学したのは明らかにはされていないけれども、白塔の「武器陳列場」で「日本に居つたとき歴史や小説で御目にかゝるだけで一向要領を得なかつたものが一々明瞭になるのは甚だ嬉しい」と書き、ポーシャン塔で「ジエーン」の文字を前に「英国の歴史を読んだものでジエーン・グレーの名を知らぬ者はあるまい」というように、イギリスに対する知識の多くを書物から得ていることがわかる。さらに「あとがき」にあたる箇所で、『倫敦塔』を書くのに参考にしたものとして、シェークスピアやエインズワースの作品、ドラロツシの絵画をあげている。これらの事柄が示すものは、余が持つイギリスやロンドンに対する知識が、現代、つまり二〇世紀のものではなく、古のものを基盤としていているということである。だからこそ余は二〇世紀のロンドンの発達した姿に違和感を覚え、歴史の香りを色濃く

残すロンドン塔へと足を向けたと考えることができるだろう。余にとつてロンドン塔は、余が学んできたことの象徴として「二十世紀を軽蔑する様に立」つのである。

このようにロンドン塔を目の前にした余に、ロンドン塔はその期待を裏切らない姿をみせる。だからこそ「此倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てゝ眼の前に望んだとき、余は今の人が将た古への人かと思ふ迄我を忘れて余念もなく眺め入」ることになるのである。余は塔橋に立つて、外部からロンドン塔を観察する。ロンドン塔を取巻く風景、河の流れ、帆懸舟、伝馬船、その全てが「過去の感じ」を与える。二〇世紀の現代と切り離され、対峙する存在として、ロンドン塔が余の目に映つたとき、余は自らを受け入れる場としてロンドン塔を認め「向ふ岸から長い手を出して余を引張る」ように「塔に行き度」なる。これは余がロンドン塔に対して、自分の居場所を発見したような安心感とともに、学んできたことを実際に目にすることが出来るという強い興味を持ったことの証なのである。

三

余は塔橋を渡り、塔門へとたどり着く。「門を入つて振り返り、そこにダンテの「神曲」の一部が「どこぞに刻んではないかと思」う。余が「此時既に常態を失つて居る」と書いているのは、塔門を潜つた余ではなく、語り手として過去を振り返つての感想である。この言葉はロンドン塔訪問を終えた余が「自分ながら少々気が変だ」と認識した状態が、訪問の一步から既に始まつていたことを伝えているのだ。余は、ロンドン塔に地獄、すなわち死の世界を見ている。「倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたもの」だとし、「倫敦塔の歴史はボ

ーシヤン塔の歴史であつて、ポーシヤン塔の歴史は「悲酸の歴史」とする。余のロンドン塔への印象が死の匂いに満ちた世界として、余のロンドン塔を見る目を支配している。

余はロンドン塔訪問中、「空想」という言葉を繰り返し使う。一度は血塔の高窓を見上げて、「二王子幽閉」の場面を思い浮べる個所。「やがて烟の如き幕が開いて空想の舞台がありく」と見える。もう一度はポーシヤン塔の「題辞」の中に「ジエーン」という文字を見付け、そこから「ジエーン・グレー処刑」へと進む個所「動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る」。

これら「空想」という言葉によつて語られる物語は余が「あとがき」で示しているように、シェークスピアの『リチャード三世』、エーンスワースの『ロンドン塔』そしてドラロッシの絵画『二王子幽閉』と『ジエーン処刑』をそれぞれ下敷きにしている。『倫敦塔』はこれらの物語をちりばめながら余がロンドン塔を巡り、思いを為す作品である。

しかしながら、余がこれらの挿話へ入り込む状況、余との距離、「空想」から抜け出すきっかけは、それぞれに多少異なつたものとなっている。まず第一の「空想」である「二王子幽閉」では、番兵の横に立ち、血塔の高窓を見上げる。「やがて烟の如き幕が開いて空想の舞台がありく」と見える」と、場面の切り替えをはっきりと自覚している。余が居り、まるで「舞台」を見るように「二王子幽閉」の情景を描き出す。最後には「空想は時計の音と共に破れる」と余は我に返る。

「断頭吏」の場面では、ポーシヤン塔の壁に刻まれた「題辞」を見ながら、それを刻んだ人々の心境を深く読みとろうとして、刻む意味を理解したと見えるとき、余が想像の糸を茲迄たぐつて来た時、室内の冷気が一度に脊の毛穴から身の内に吹き込む様な感じがして覺えずぞつとし

た」と、その導入を五感で感じ取り、余のまわりの空間そのものも変化して「地面の下に通ずる穴倉」の前へと移る。さらには指で血と思しきものに触れることすら行っている。ここで余は断頭吏が立っている想像の舞台に自らも立っていることが確認できる。そして「忽ち甕も首斬りもカンテラも一度に消えて余はポーシヤン塔の真中に茫然と佇んで居る」と「空想」からさめて現実に戻ったことを自覚することになる。

最後の「ジエーン・グレーの処刑」の場面へは「怪しい女」がダッドレー家の「題辞」を説明したあと「ジエーン」と刻まれた文字を目にしたとたんに訪れる。「余はジエーンの名の前に立留つたぎり動かない。動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る」と、ここでも「空想」への切り替えは余の自覚しているところである。だが、今回余は、舞台の上に立っているだけではなく、ジエーンが先程見た「怪しい女」だと気付くと「馳け寄らう」とする。しかし「足が縮んで一步も前へ出る事が出来」ないあいだに、ジエーンは断頭吏に首を刎ねられる。その瞬間「余の洋袴の膝に二三の血が迸しると思つたら、凡ての光景が忽然と消え失せ」てしまふ。余はここで現実にかえり、出口へ向うが、その途中、鐘塔の下を通りかかると、ガイ・フォークスが顔をだし、その声まで聞えてくる。「自分ながら少々気が変だと思ふ」ことが出来る。余の意識はすっかりしているはずである。にもかかわらず現実と「空想」が錯綜してしまっている。これは余が、一つの歴史的モニュメントであるロンドン塔をめぐるながら、知識としての「空想」を交えることで、現実のロンドン塔と「悲酸の歴史」という余のロンドン塔観が結合し、「二十世紀を軽蔑する」という余のロンドン塔が現代に生きた存在となつた証しだといえる。

四

余はボーシヤン塔に入り、その壁に刻まれた「題辞」を見る。「凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲みとは此怨、此憤、此憂と悲の極端より生ずる慰藉」として刻まれた「題辞」は、刻んだ人が死という運命を目前に迎えているからこそ、刻んだ本人にとって意味深いものであるはずだが、彼らはその運命と共にこの世を去った。今余の目の前にあるのは刻まれた「題辞」のみであり、人物はもちろん、死と隣り合わせの緊張感も悲壮感ももたない。そこにあるのはあくまでも文字なのであり、その文字に込めた思いは伝わることがない。だからこそ余はこれらの「題辞」を反語と呼び、自らは記念となるようなものは残したくないと考えたのである。しかし、山崎甲一^⑤が指摘するように「斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらう」と余は幽閉された人々の心の中を想像する。ここには死以上に辛い生が存在していたのだと。そして余は「又想像して見る」と、死より辛い生を生きながら自ずから死を選ばなかった人の胸中を考える。

「敢て死を怖るゝとは云はず」とは、何を意味するのか。もしも本当に「生きる」といふは活動して居るといふ事だとするならば、このロンドン塔に幽閉された人々は、その理由を政治的対立や宗教的対立に求めることが出来るはずである。ならば生き長らえるために、恭順や改宗という手段を取ることも可能だったのではないだろうか。幽閉された人々が助命の手段を取らず「死よりも辛い苦痛を嘗めた」のは、彼等が彼等の信念を守ったためであろう。

幽閉された人々が肉体の死を怖れず、なおかつ「如何にせば生き延びらるゝだらうか」と考えたとき、すなわち彼等の信念、信条を後の世に伝えることで、精神の生を生きようとしたとき「只一となり二となり線

となり字となつて生きんと願つた」のである。

文字そのものは、魂を持たないただの記号でしかない。その意味において余は「題辞」を「反語」だといふのである。文字に意味を与え、情熱を吹き込むのはひとえに読む人の共感と同情なのである。

ギルフォード・ダッドレーが刻んだとされる「ジエーン」の文字を見た余は、「英国の歴史を読んだもの」としてジエーン・グレーに寄せる「其薄命と無残の最後に同情の涙を濺がぬ者はあるまい」という感情故に、余と同じように「歴史」を知っていて、「恰も己れの家名でも名乗つた如くに感ぜらるゝ」ように「題辞」を読む「怪しい女」をジエーン・グレーに見立てて、「空想」の世界に入り込むのである。

五

余は、ロンドン塔をめぐるながら「想像」と「空想」をくり返す。「想像」とは「斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらうと想像」し、「又想像して見る」と書かれるように、連想をくり返すことで思考を深め、他者の世界観や体験を再構築し、自らの認識として獲得していく作業であり、これは意識のうえでなされていくことである。この場合には「題辞」を「反語」や「空しき文字」としか見る事が出来ない。余が、「書く人の心の中」を想像し、「生を欲する執着の魂魄」だったのだとまで思いをめぐらすことだといえる。また、逆賊門でワイアットなどの姿を思い描こうとすることも「想像」にあたるだろう。一方で、「空想」とは「三王子幽閉」、「断頭吏の歌」や「ジエーン・グレー処刑」がそれにあたり、これらは余が今までに、シェークスピア、エインズワースやドラロッシなどから得てきた知識、印象、記憶などが、血塔の高窓や「題辞」、「怪しい女」と「ジエーン」の文字をきっかけと

してふいに起こってくるもので、こちらは無意識に沸き上がるものだと考えてよいだろう。

しかし、芸術の上で獲得した 余 の持つロンドン塔観、もしくはイギリス史観はかなり偏ったものといわざるを得ない。「倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたもの」で「倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であつて、ボーシヤン塔の歴史は悲酸の歴史」となると「英国の歴史は悲酸の歴史」という理屈になるだろう。この理屈が 余 をして「二十世紀の倫敦人」とそうでない者とを分けることになる。ロンドン塔をめぐりながら、ビーファイターに対しては「現今の英国人と話をして居る気がしない」とするのは、ビーファイターがヘンリー七世の即位に際し任命された国王護衛兵の流れをくみ、エドワード六世の治世にロンドン塔に配置された歴史を持ち、「英国の歴史を読んだ」 余 の認知している存在だからである。一方で「番兵」に「早く当番を済まして例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊び度」と想像するのは、 余 の知識の中に「番兵」の記憶がなく、彼を「二十世紀の倫敦人」と認識したからであらう。またダッドレー家の「題辞」を「恰も己れの家名でも名乗った如くに感ぜらるゝ」読む「怪しい女」も、歴史に共感する側として 余 にとらえられている。

ところが、ロンドン塔訪問を終えて宿へ帰った 余 は、「主人」によって現実を知らされる。「怪しい女」も実は「案内記」を読んで行ったために「題辞」を読むことが出来たのだ。このことは、これからの留学生活の中で、 余 の持つイギリス史観が変化していくことを暗示している。

余 が、イギリス留学直後にロンドン塔を訪れるのは、漱石の実体験からきていることもあるが、それよりも 余 が日本で「英国の歴史を読」むことによって構築されたロンドン塔観が、まだ外部の影響を

受けていないことを示している。それは文学、すなわち「題辞」と同じように、ただの記号の羅列でしかない文字を、ロンドン塔をめぐり「想像」と「空想」を駆使することで、自らの認識として再構築し、意識の中に甦らせるために必要な時期だったのである。そしてその再構築は、鐘塔の高窓にガイフォークスの姿を見たとき、すなわち「現実」と「空想」が境をなくし、「自分ながら少々気が変だと思」ったときほぼ成し遂げられたといつてよい。だからこそ 余 は、「塔」の見物は一度に限る」と一度性を強調する。

また現在に残された「題辞」が「空しき文字」であるのと同様に、ロンドン塔もまた歴史が作り上げた過去の遺産でしかない。「二十世紀の倫敦人」である宿の「主人」が、「題辞」について「えゝあの落書ですが、詰らない事をしたもんで、切角奇麗な所を大なしにして仕舞ひましたねえ」というとき、ロンドン塔は美しい建築物であることが重要なのであつて、歴史上の悲劇や「生を欲する執着の魂魄」などは必要のないものなのである。しかしこれは 余 を含めた全ての人々にも当てはまることなのではないか。ロンドン塔はただの建築物でしかない。塔自身がイギリスにおける悲劇を語ることはなく、歴史や文学もまた、書かれた文字でしかない。ロンドン塔から悲劇の歴史を感じ取るのも、歴史や文学に血を通わせ、甦らせるのも受け手がそれらをどのように感じ取るかに掛かっているのだ。

作者漱石は 余 にロンドン塔を訪問させ、そこに幽閉され死と向き合いながら生きようとした過去の人々を実感としてとらえていく過程を描いている。この他者を自らのものとして受け入れ血肉としていくことこそ、文学の存在価値なのだといえる。だからこそ漱石は、語り手を 余 という一人称で描き、過去の留学体験を「歴史的現在」で語っているのだ。「此等の位地を変更して、作家との間隔を短縮するを得べく、

短縮の結果として0の答を得る時、作家は変じて篇中の人物と化するが故に読者と篇中人物とは作家を離れて対坐するに至る」(『文学論』)というように、読み手の視点が語り手の視点と重なるとき、読み手は他者の視点を獲得する。読み手は、余 という視点人物を通して作品を経験することになり、それは取りも直さず他者の存在を認識することになる。

このことは、後年漱石が学習院で講演した「私の個人主義」で語られるように「自己本位」の重要性とそれを推し進めていくとき

第一に自己の個性の発展を仕遂げやうと思ふならば、同時に他人の個性も尊重しなければならないといふ事。第二に自己の所有してゐる権力を使用しやうと思ふならば、それに附随してゐる義務といふものを心得なければならないといふ事。第三に自己の金力を示さうと願ふなら、それに伴ふ責任を重じなければならないといふ事。つまり此三ヶ条に帰着するのであります。

という「他人の個性」の「尊重」、「義務」、「責任」を理解するうえで、「想像」と「空想」が重要な視点を与えてくれることを示している。漱石が高浜虚子に勧められて『吾輩は猫である』を書いたあと、この『倫敦塔』に託したことは、イギリス留学によつて獲得した、文学の意義や必要性を作品として示すことであつたのである。

注

- ① 『漾虚集』(大倉書店・服部書店 一九〇六年五月)
- ② 越智治雄「漱石の初期短編——『漾虚集』一面——」(『國文學』學燈社 一九七〇年四月)

- ③ 江藤淳『漱石とその時代 第三部』(新潮社 一九九三年一〇月)
- ④ 『文学論』第四編第八章「間隔論」(大倉書店 一九〇七年五月)
- ⑤ 山崎甲一『『倫敦塔』論』(『文学論叢』一九七五年二月)

「この「題辞」について強靱な思考を重ねる余の眼の焦点をみると、それは「一となり二となり線となり字となつて生きん」とした囚人の究極の「排悶的手段」そのものに注がれている訳ではなく、あくまでも、「斯んなものを書く人の心の中はどの様であつたらうと想像して見る」ことの方にあつたことを見失つてはなるまい。」

(本学大学院文学研究科研修生)